MMM2016 の作家たち　vol.1

田口　茜

MMM
みなとメディアミュージアム

みなとメディアミュージアムとは？

みなとメディアミュージアム（以下、MMM）は、茨城県ひたちなか市ひたちなか海浜鉄道湊線沿線を舞台に開催する現代アートプロジェクトです。 web などを通して全国からアーティストを募集し、コンペティションののち出展者と作品を決定します。出展された作品は会期中 (8 月中、約 3 週間)、那珂湊の駅やまちなかを中心に、ひたちなか海浜鉄道沿線や車輌内にも展示されます。カフェやワークショップの運営も行います。「産（那珂湊地区商店街、ひたちなか海浜鉄道湊線）+ 学（主に大学教員、大学院生、大学生）+ 芸（アーティスト）」の三者からなる実行委員会により運営されており、芸術表現と地域との協働によるまちの活性化を目的として活動しています。 2009 年に第一回を開催し、今年度で第八回目の開催となりました。

インタビューした作家たち

後藤　宙
山本　大樹
臼田　那智
木内　裕子
松井　ゆめ
森田　柾

この冊子は、2016 年度の MMM に参加された作家、6 名に MMM スタッフ（田口茜）がインタビューしたものです。

はじめに。〜アーティストと対話する決意〜

目紛しい速さで夏が過ぎ、キュレーションという仕事に幕を下ろした時、
激しい虚無感に襲われた。
私は MMM2016 のいちスタッフとして、
どう地域と関わり、どう作家と関わっていたのだろう。
私が一番見直したい部分が空白のままになっていた。

MMM という舞台に私は居るはずなのに、どこにいるのか分からなかった。
そんなことを毎日のように振り返っていたら、やりきれない気持ちになっていく。
やっぱりこのままでは終われない。私は私の作品を作ろう。
それが私の答えだった。

作家の背中を一番近くで見ていた私にできること、
それは純粋に彼らと対話し、あえて言葉に残すことだと思った。
「彼らは何を信念に持ち、制作しているのか。」
インタビュー冊子にまとめようと考えた。
来年、再来年と続くであろう、MMM という美術館が
どんな場でなければならないのかを探すために。

作家の言葉を大量に触れて、私の見る世界がどう変わるのか。
まだ見ぬ世界に楽しみで仕方ない。
MMM の息吹を感じるのはこれからだ。

田口 茜

後藤さんの作品「構造の表象」の様子

後藤宙（ゴトウカナタ）

1991年 東京生まれ
東京藝術大学大学院美術研究科先端藝術表現専攻在籍。
アーティスト。主なメディアとして糸を使った彫刻やインスタレーション、平面作品を展開する。
規則性や連続性の中にある普遍的な美しさに恣意的な変化を与えることによって作品化している。
最近は専ら構造に興味がある。

作品には基準がある

小さい頃、俺は空き箱やトイレットペーパーの芯とか組み合わせて遊んでた。よく分からないものを**手が動くままにね**。記憶としてよく覚えているのは、針金で遊んでいる時にグニョグニョ曲げてボールみたいな形のものを作ってたの。次の日、父がそれをいいなと思ったみたいで壁にぴょって飾った。父自身が本当に良いと思ったものだから壁に飾って評価したんだよね。「わーすごい頑張ったね。」って俺が作ったものの全てを褒めるとか、賞状を飾るとかそういうことじゃないことをしてくれたんだよ。

俺は**作品には基準がある**ってことを、父に**良いと思ってないものを褒められること**で理解した。自分が「ちょーすごいの描けたんだよー。」って言って親に見せたら「すごいね。」と褒めると思うんだけど、そうじゃなくて、作品には基準みたいなものがあるっていうことを父は子供の創作の中で**うっすら感じ取らせた**んだって思う。

常識とは少しずれたお家

俺は、結構経済的に**ヤバい環境で育った**って思ってる。3、4歳の時に両親がガラス工房を始めたんだけど、親父は抽象絵画を描いてて、ママはバイトをしてた。ガラス工房を始めた頃は、家族で3ヶ月ぐらい同じキャンプ場に泊まっていたくらい経済的に困窮してたんだよね。でも、その頃から今までガラス工房の家族としてやってこれちゃってる。そういうことを考えると、俺は両親の背中によって沢山のことを学ぶっていう**言語外の教育**を受けてきたと思う。

仮面からもらった感動

自分の作品に糸を使い始めたきっかけは、神保町の本屋さんで糸を使った仮面を見たことだったかな。神保町の本屋は二階建てになっていて、一階は本屋で二階が画商の倉庫になってた。その倉庫にコロンって仮面が転がっていたんだよね。仮面は平らな顔なんですけど、鼻だけ飛び出てて、そこに糸がかけてあるっていうもので。仮面やお面って、眉毛や目が飛び出されるのはわかるんですけど、その仮面は違って糸が張ってあった。その時、意味は自分でも分からないけど感動したんだよね。俺らはデッサンとか絵の具で描写してキャンバスに描ける。でもそういう感動とは**別種の相当かけ離れた感動**を俺はそこでせざるを得なかった。

なんだこの生物の爪痕は!!

僕がステラを見た時は予想して見に行ってないんだよね。つまり、モナリザが見たいからルーブル行くとかそういう体験じゃないんだよ。俺にとっては街や作品を見た人にぶつかるっていうことをしたい。**驚きを届けたい**っていうことだから、出会い頭の事故のようなものを演出したいのよ。街の人にとって異質なものが飛び込んできて俺の爪痕（作品）を見た時に「**なんだこの生物の爪痕は!!**」って言われちゃうぐらいのことを起こしていきたいと思ってる。

「なんだこの生物の爪痕は!!」って街の人に思ってほしい。僕は作品を通して街にぶつかりに行ってるんです。」こう話すのは、糸を使った作品を制作する、後藤宙さん。

後藤さんは、ガラス工房を営む両親の長男として生を受け、生まれながらにして、「ものつくり」が大好きだったそうだ。高校時代に美術の道で突き進むことを決めた彼は、神保町の画商の倉庫にあった仮面に心を奪われ、糸を使った作品制作を始める。規則的に紡がれていく糸で出来た彼の作品は、精密で美しい。

MMM の展示では百華蔵（那珂湊駅近くにある蔵）の空間全体をインスタレーション作品にした。赤い糸で紡がれている空間は別世界に来たようで、息を飲んで見入ってしまう。来場者は言葉を失いながらも、その顔は「驚愕」と言った感じであった。まさに彼は彼自身が作りたいように作り、街にぶつかりに行き人々の心に衝撃を与えた。

脱優等生

世の中的な優等生になるっていうのは**イージーモードの人生**だと思ってる。俺は継続的にものつくりをしたことで、ものつくりの面白さに気付いた。それは、優等生的なことより段違いな面白さだなって分かったんだよ。優等生は求められているものが先にあって、クリエイティブかどうかも危ういと思う。従う先の人のyesかnoによって全てが決まってくる。一種の思考停止みたいな。俺は俺の人生を俺がやるぞっていうことを思って、一生懸命生きてたら**俺自身の優等生**になってるはずなんだよね。先生とか教祖とか今ある通念上ではかれるものに超従属的でいるっていうことは、結構ばかばかしいと思ってる。もっと違うものになっていくのが人なんだよ。

俺が小学校の時とか人より理解力が少し良かったから、先生はこう言っているぞっていう理解が簡単に出来た。先生の言っていることの言い換えをしただけで褒められちゃったりして。でも、それは**本質ではない**って思い始めた。それより**自分がどう思うかが大事だよなって**。優等生は、世の中的に見て人材なのかもしれないけどそいつらが輝きを放てるかって言ったらそれは違うと思う。

呪いに動かされている

フランク・ステラの作品を川村記念美術館っていうところで見た時に、打ちのめされるというか衝撃が走った。言葉にしちゃうと呪いにかけられるぐらいの衝撃を受けて。俺は作品から呪いにかけられるぐらいの衝撃を受けているので、返さないといけないと思ってる。衝撃を受けて、その作品を買うのではなく俺は**人生をかけてそれに値するぐらいの挑戦**をしなきゃいけないんじゃないかって思っちゃったんだよね。芯がある作家の作品を見たら時代を超えてまたあの衝撃を起こせるんじゃないかなって思ってて、それが俺の原動力だと思う。だからステラのように**衝撃を伴って人の前に突然現れて、人生が狂っちゃうような奴が生まれればいいなって**思ってる。

～考えのアップデート～

私は後藤さんからの「脱優等生」の言葉に深く共感した。確かに、頭が良くて優秀な人間は、賞賛される。しかし、重要なことは偏差値や成績ではない。自分がどんな意志を持つかということなのかもしれない。誰に従うかと聞かれればそれは自分である。自分の中で一番の優等生でいることが意外にも難しい。

私は後藤さんの言葉に私自身の優等生になれているだろうかと問いただした。目の前にあるタスクに追われ、何をしたくて大学に通っているのか分からなくなってはいまいか。もしくは、何かに依存し自分を見失ってはいまいか。自分に正直に生きたいと思った。

ヤマモト 山本 ダイキ 大樹

「倫理や生活の規範から少しでも外にイメージを向けたいんだ。」そう語るのはアーティストの山本大樹さん。MMMでは湊線沿線に住む高校生のポートレートを制作した。

野球一筋だった田舎の高校生が大学の時に初めてカメラを触り、「生」や「死」を常に考えながらシャッターを押していた。何気ない日常の一部分ではあるが、その一瞬をあえてカメラにおさめることで、人々は立ち止まることが出来るのだという。

1991年 東京都生まれ
明治大学大学院理工学研究科
新領域創造専攻ディジタルコンテンツ系修了。
写真の制作を行う。
2015年「BankART Artist in Residence 2015」
BankART Studio NYK（横浜）
2016年 個展「Passage」MUSEE-F（渋谷）

飛び込んで試してみたかった

とにかく展示ができるという機会、**展示する場所とある程度人に見てもらえる状況**みたいなものが欲しかった。MMMは地域規模だし、伝統あるイベントであることとかを判断するとやっぱり出したいなって思ったの。

もうひとつは結構単純に全く縁もゆかりもない場所で、自分のやってきた写真とは別のものがやりたいなって思っていた。MMMというタイミングがあって、全く知らないところに一人で、**飛び込んで、試してみたかった**っていうことがありますね。

カメラを持って気付いたこと

性の問題とか死の問題とかも、みんなあまり考えたくないよね。**見ていないふりをしても生きていける**じゃないですか。でもそういう見ていないふりみたいなことが気持ち悪くて。今東京で生きてて、あーなんか死んじゃったなあっていうことって思わないじゃないですか。抜けたテナントとか見てもすぐ新しいところが入るから、**死んだままの状態を意識できない**よね。

本当に写真を撮っていなければ死についてとか考えていなかったかもしれない。だけど、カメラを持ってるからそういうところに目が行くわけで。カメラを持っている人間がこういうものを撮ることで、カメラを持ってない人に、**立ち止まって見てもらう**みたいなことに意味があるのかなって思っています。

生身の人間だから怖い

今回の作品で高校生を撮ることは、実際に相手は生身の生きている人間だから、対話することは俺もやってて**怖かった**。友達同士だからとか関係なしに**生身の人間と対峙する**っていうのはやっぱり怖さがあるよね。良い人同士か分からないにせよ、ある程度悪い奴じゃないという前提を共有してみんな生きているから、コミュニケーションが円滑になっている。でも本当はわかんないじゃん、生身の人間だから。そういうの分からないからこそ、生身の人間と向き合っていかなきゃならないよね、だからその怖さを**伝えるためにも今回は写真を撮ってる**のですよ。

山本さんの作品「episode」の様子

言葉で上手く話せない分、写真で撮って伝えたい

ちょっと話が遠くなっちゃうかもしれないんだけど、不倫の問題とかってすごい騒がれるじゃん。倫理の規範の中でさ、不倫をするのは良くないってことがあるわけ。でも実際には動物としての性欲があって、恋してはいけない人に恋をしてしまう、っては倫理の規範を超えたことなわけですね。倫理ってのは、人間が決めたもの、でもその人間の倫理って結局、生身の人間を前提にしているのではなく、**社会のあり方みたいなものに基づいて決められている**と思う。この世には、いろんな動物がいるわけで、個体差もあるわけ。そういうものをなるべく平均化して、一番問題のないところに倫理っていう線が引かれている。だから、**倫理や社会のルールから逸脱すること**ともある。動物的な、生身の人間だからセックスもするし、やがて死ぬ。そういうことを、言葉でうまくしゃべれないからさ、写真に撮って伝えたいと思う。

縛られているから見えること

人は死ぬし神にすがっていないと生きてはいけない人もいる。全て現実なんだよね。たとえば、デモをやっている人がいるけれど、デモをする人は自分の生活のためでもあるし**理想を追い求めてデモをする**訳でしょ？理想というものは生活の中で無くても良いものなのですよ。俺は散々外に目を向けなきゃって話をしているけれど、実際働いていると**日常生活で精一杯**なんだよ。理想があるとはいえ、自分は生活のためにお金を稼がなければいけない。本当は純粋なアーティストとして自分の表現を突き詰めたいけれど、**生活っていうものはやっぱり重くて蔑ろにできない**。本当に生活にまみれている労働者な訳よ。理想を考えるのは大事だけれどそればかりやってらんないよって思う。24時間アートのことを考えている人も実際に居るわけだよね。そういう人はすごい尊敬している。でも、そうしなきゃいけない訳ではない。俺は生活があるし、生活に追われてこの範囲に**縛られているから見えることだってあると思う。そういう表現をちゃんとんと追求したい。**

山本さんが展示したブリアン

～考えのアップデート～

「田口もせっかくアートに携わっているのだから、ずっとアートのことに携わって、自分の理想を追い求めればいいじゃないかって言われるけれど、実際就職するでしょ？」こう山本さんに言われて、私はドキッとしてしまった。確かに、私は作家に対してインタビューをしているし、今後も活動し続けたい。でも、将来を考えた時、私はずっとこうして作家の前で話しを聴いていられるだろうか。理想と現実は全く違う。その中でどう折り合いをつけていくか。そう問われた気がした。

臼田 那智（ウスダ ナチ）

1991年生まれ 東京都出身
2014年 武蔵野美術大学日本画学科卒業

「人が選ばないようなものを美しくカッコよく見せたい」そう話すのは、武蔵野美術大学出身、臼田那智さんである。彼女は幼少期から母子家庭ということをコンプレックスに抱えていた。「好き好んで、そういう環境になったわけじゃない。」彼女の目にはどこか寂しさを滲ませている。

しかし、その寂しさは芸術というベールを被すことで、強く逞しい作品として生まれ変わっている。作品には人が嫌悪感を抱くような公共のゴミさえ素材として貼り付けており、実物の作品にしかない躍動感を感じることができる。

「なぜ、公共のゴミさえ作品の一部にするのか。」その質問に、「嫌悪感を抱くゴミを作品に取り入れていることの理由は自分のコンプレックスをかっこよく見せたいからかもしれない。」とゆっくり話していた。

思いっきり作りたい

私、大学の卒業制作で滑り台の作品を作ったんですが、その作品が今まで制作した作品の中で大きかったし、関わった人も沢山いて、**一番楽しかった作品**だったんです。大学を卒業してから小さいアトリエしか借りられなくて、展示する機会があっても小さい作品しか置けなかった。でも、MMMだったら地域アートだし**思いっきり作れる**んじゃないかなって思ったので、応募しました。

自然に寄り添った画材 岩絵の具

大学で日本画の勉強をしてた時に、岩絵の具にしか出せない**絵肌が面白い**って感じていました。岩絵の具って、種類があって、絵肌がざらついたりとか逆に細かったりして、**作品の実物ならではの表情の違いが出るんです。**実物で見るから面白いみたいな、実感を自分の作品に得たくなりました。そこで他にも色んな素材を作品に貼り付け始めて、最終的に今の作風になったんです。

臼田さんの卒業制作Ⅰ「Personal File No.1-4」

臼田さんのアトリエ

っていう詩なんですよ。どう思います？最後の、「あーいいことといっぱいだな。あーこの世のすべてが楽しいなー」という言葉に私は**度肝を抜かれた**というか衝撃があったんです。だって、そんな訳ないじゃないですか。この世のすべてが楽しい訳ないじゃないですか。なのに、「この世のすべてが楽しいな。」と言い切っちゃっているところに驚いてしまいました。嫌なこととか、つらいこととか苦しい事とかを全部**自分の中で吸収して乗り越えた**うえで、この詩を書いたんじゃないかって考えると、こういう気持ちこそ大事だなって思ったんです。闇とか悪とか全然感じれないもの程、実際は**内に込められているんじゃないのかな**って。仕事をしている最中だとか、アトリエで終電ギリギリまで作業してて翌日は仕事だから、寝なきゃいけない時とか。そういう時、**現実に戻る瞬間**があったりする。作っている最中は最高な気持ちでいるけど、我に返った時にほんとはダメなんじゃないかなとかちょっと自分がしていたことが恥ずかしく思えてきたりとか。躁と鬱ではないけれど、気分は上がる時もあれば下がる時もあるんですよ。そういう意味で作品を作り続けることは辛い行為だとも思っています。

美しくかっこよく見せたい

私は自分自身の**家庭環境**にすごくコンプレックスがありました。母子家庭で父親に対しても印象悪く感じていた。友達とかは、親は金持ちだし、ほしいものなんでも買ってもらっているし、家は広いし綺麗だし、私はいつも自分と他人を比べていました。私は**体裁とかを気にする子供**で、だからこそハングリー精神に満ち溢れていて、つらい状況がいっぱいあったから、**なにくそ**と思いながら、全部乗り越えて頑張りたいって思いが強くあったんですよ。

青空みたいな存在でありたい

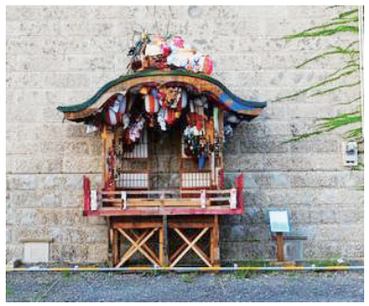
作品を生み出す上で、心にとめてある言葉があります。乙武さんの本の中にある**小学校5年生の男の子**の詩が私の一番好きな詩なんです。読みますね。

チューリップ

あー、お日様が気持ちいい。
あー、そよ風が気持ちいい。
教会の真上に咲きたいなぁ。
どんな景色だろうなぁ。
一度、黒い花に咲いてみたいなぁ。
みんなにどう思われるんだろうなぁ。
あー、いいことといっぱいだなぁ。
あー、この世のすべてが楽しいなぁ。

杉並子ども詩文集「杉っ子」二〇〇九年版 三号所収

人はあえて好き好んで貧乏な生活なんて選ばないし、母子家庭とかも選ばないと思うんですよ。だからこそ、**私は人が選ばないようなものも美しくかっこよく見せたい**って思っています。そういう意味で、人が好まないようなもの、人が毛嫌いするような素材としてゴミを使っています。



「プラスチック プラクティス」の様子

～考えのアップデート～

私は臼田さんから、作家がプライドを持って創作を行うことの意味を教えて貰った。”作品”という空間やモノが作家にとってどんな存在なのか。彼女が猛暑の中、長期に渡りリサーチと創作活動を行ったことによって見せてくれた。

MMMが終わって、私は少し変わった。街を歩きながら、「私にとっては変哲のないものでも、別の誰かから見たらそれはとても大切なものかもしれない。」と考えるようになっている。私は臼田さんに出会って、世界の見え方が変わっている。

キノウチ ユウコ
木内 祐子

木内さんの作品「那珂湊松物語」の様子

1981年徳島県生まれ、大阪・埼玉・群馬・東京で育つ。
2008年多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画研究領域修了。
2011～13年四谷アート・ステュディウム、
2014年ニューシネマワークショップ在籍。
主にフィクションによる映像表現を通して、社会の構造と人々の生活との関係を探る。

「世の中について、知ったり考えたりするために作品を作っている」そう話すのは近年数々の映像作品を創出している木内祐子さん。木内さんの映像作品は社会構造や、環境問題、個人のパーソナリティーに至るまで多種多様なジャンルを題材にしている。多くはレジデンスに参加し制作したものが多いようだが、木内さんにしかない切り口は見るものを引き込み、問題提起をしてくれる。

幼少期、転勤族だった木内さんは、社会に対して熱く語る先生に出会い、日本の情勢に興味を抱くようになる。ソ連崩壊の時期と相まって、テレビで見る出来事に関心が向いていた。今までの日本、もしくは人が何を積み重ねてきたのかそのルーツを探り、考察するために、木内さんは作品を作っている。

人々が積み重ねてきたものはどういうものか

去年、海外のレジデンス（レジデンス：作家を招聘して作品制作を行わせるイベント）に参加したのですが、私はあまり英語が得意ではなくて、海外の人とプロジェクトを行うにあたり、言語の壁を感じました。なので、まずは言葉の通じる日本国内でやってみようと思いました。また、日本に生まれ育った私は**自分の足元**に興味があります。足を運んだことのない地域で人々が積み重ねてきたものはどういうものだろう、っていうことを考えていました。そんな時にちょうどMMMの公募を見つけました。

絵画で表現する技量はない

絵画を大学では専攻して、絵しかやっていませんでした。大学入ると考え方っていろいろ洗脳されるというか大学で教わることがすべてみたいな感じがあるんです。でも、大学卒業してしばらくしたら、コンセプトが変わってきて映像やり始めたって感じですね。絵画をやっていた時より、コンセプトが**タイムベースになった**。絵画をやっていた時は、考え方が上に乗っけていく**レイヤー構造のようなもの**だったんです。一つ論として考えていることを人によっては論文にするし小説にするし音楽にする。でも、私は自分の考えていることを**絵画で表現する技量はない**なと思ったんです。そこで、わかりやすく時間制のある映像になったんです。

興味の対象が「社会」

私の**興味の対象が「社会」**なんです。興味自体が大きすぎるとよく言われますが、**社会構造や社会のシステムと人間の生活との関わり**みたいなところです。みんなが考えるべきだと思うんですよ。自分が生まれたんだけど自分が生まれる前には人類がいろいろ積み重ねてきたものがあります。なので、自分が立っている場所はどういう場所なのかを探究してみたいんです。今の社会おかしいじゃないですか。でも、みんな日常のほんの小さいところを描くみたいなものが美術でも映画でも主流ですよね。自分が生活している小さな単位だけれど、それを掘り下げていったり違うところに広げていったりすると、結局は社会の今の状況だったり仕組みが関係してきます。社会情勢と関わりを持った作品を作っていきたいという志はあまりないけれど、多分それが軸になるんだろうと思ってます。

ルーツを探る方が面白い

政治や歴史は好きでも、私にとっては興味深いと思って探求するものです。自分で作り上げて政治をやりたいとかは思わないかな。一つの考えを突き進めていくよりかは**様々な考えがあり、それぞれどう相関し合っているかっていうことに興味があります**。「～がいけない」という考えを声高に訴えることには興味がなくて、「～がいけない」という考えがなんで発生したのかという**ルーツを探る方が面白い**と思っています。なので、一つの立場に立って話していると、どうしても偏るじゃないですか。偏りが私は大嫌いなので、今の所強く言わなきゃという何かがないだけなのかもしれないんです。

いつか芽を出す種を仕込む

美術教員の立場になって学んだこともあります。本来は美術は美術家になるためでなくても、誰もが学校でやること自体は**0から1を作りだす体力のいる作業**だし色んなことができるじゃないですか。真っ白な紙から始まるものでもどんな方向にも広げていけるものですよね。現実的に、学校教育は同じグレードで「作る」っていうものを求める傾向にあるので私はすごく学校の美術は合わなかったんですよ。美術をやることって5分後とかに見える成果ではなくって5年後とか50年後とかに**いつか芽を出す種を仕込むようなところがある**じゃないですか。そういうものは子供の時期に幾つも得ておいた方が良いと思うんです。なので、そういうことをしたかったのだな、と思います。すぐに効果が出ない。出ても良いのだけど、出るとは限らないものかなと思うんですよね。

世の中について知ったり考えを深めるために作品を作る

何かのメッセージや何かの気付きを人々に与えようとかにはあまり興味がなくって、共感する人がいたら良いなくって、そこから何か気付いたり見方が変わる人がいれば、それはそれで良いとは思っています。ただ、申し訳ないけど私は**個人的に世の中について知ったりとか考えを深めたりとかするために作品を作っている**ところがある。論文を書く人だっていろんな調べものを通して社会や歴史を理解しているじゃないですか。それと同じです。私は作る人だしっていうことが図々しくも根底にあるので作家なんです。

命というより擬人化

MMMでの作品は、ものが擬人化した姿が出てきます。あれは命というより、擬人化です。ものには何かがまとわりついていると思うのですよ。例えば、愛だって悲しみだって、気持ちも一つ一つ擬人化できると思ってて。**命を通り越して人格がある**と思っています。神様も人格を持っているじゃないですか。そこが面白いのかなって思うんですよね。命っていうと尊いねっていうか、何者でもないような気がするんですけど、ものによって性格だったりとか**人と交わることで性格や人格になる**ように思っています。

～考えのアップデート～

私はインタビュー中、足跡に興味があると話す木内さんの言葉にどこか親近感を感じていた。なぜなら、私の興味も近しい場所にあると思ったからである。私は、木内さんのように社会情勢に詳しいわけでもないし、社会システムと人間の関わりを、詳しく知りたいと思ったことはない。でも私は、MMMに集まる人たちの信念とそのルーツを、インタビューを通して探っている。確かに木内さんとは、やり方も対象も何もかもが違うけれど、人の足跡に興味があるという木内さんの言葉に、私は共感せざるを得なかった。

松井（マツイ）ゆめ

栃木県宇都宮市出身
流木、廃棄物、場所の特性を使って
「記憶の再構築」をテーマに
インスタレーション、彫塑、立体造形を制作。
野外展を中心に活動中。

松井さんの作品「カモメをつくろう 2016」

以前から、那珂湊周辺の海で流木を拾い、作品を制作していた松井ゆめさん。
流木を作品の素材にしてからかれこれ10年。素材に対しては並々ならぬ思いを注いでいる。
流木採集に同行させて頂いた際、松井さんは流木を見ては「この子はどこからやって来たんだろうね。」「この子は良い味が出てるよね。」と両腕で持てる限りの流木を抱えて砂浜を歩いていた。そんな松井さんはどこか楽しそうで、そして生き生きしていた。
造形作家として、流木だけでなく、使い捨ての靴や薄羽紙など、廃棄物になるような素材を選んで作品を制作している。それぞれ素材が持つ歴史に耳を傾けながら作られた松井さんの作品は作品自身が意思を持って大地に立っているようで、どこか躍動的である。

作品を作る自信がなかった

私自身が地域をアートで元気にしようみたいなイベントにすごく興味を持っていたの。そんな時にＭＭＭの応募があって。私が住んでいる宇都宮から近いし自分が**いつも流木を拾っている場所**（大洗や那珂湊周辺）でもあった。自分がここでどういうアートが出来るか、どういう作品を映し出すことが出来るか**イメージしやすくて自信もあったの。**

分を通して再生出する実験をしているの。廃棄物に対して、「こういう姿になりたかったんじゃないか」とか「もっとこうなっても良かったんじゃなかったのかな」っていうことをこっちが想像してあげて廃棄物に提案する。良いかなって思ったら作ってあげるって。企画書の段階で**廃棄物にとって、この子が一番成りたい方向へ**、止まっていた時間をまた動き出すようにするにはどういう方法が一番良いのだろうっていうことを考えてる。

作品を見てくれる人との関わりを持ちたくなった

流木を使い始めたのは、高校生からだね。最初は、なんとなくインスピレーションで「この素材私に合う。」って感性だけで制作してた。でも、そうやって感性だけで制作していたら**自分のアーティスト人生に限りがあるな**と思ってしまって。誰かが見てくれることによって、作品が生かされるし、誰かが関わってくることで作品自体が良いものにもなる。それって**作者と作品だけじゃ絶対に成立しないこと**であって、すごく今更だけどそういうことに最近、気付いたの。ずっと自己満足だけでやっていたら結局私が楽しくないなって。もっと色々な人と分かり合えてどういうことを考えてるのか。この作家さんはどういうものを感じて作ったのか。**作品を見てくれる人との関わり合いを持ちたくなった。**

関わり合いを持ちたくなったきっかけとしては、アートイベントとかで野外展に行くようになったからですね。自分がお客として行くようになって、アートってこういうあり方があるんだ。別に美術館で畏まって見なくても、もっと、自分の中にすっと入ってきて**親身になれるもの**なんだって思えた。それね、ほんとに面白いんだよ。客観的に色々な作品を見るようになって、作家の善意だったり、伝わる時ってあるじゃない。感動するんだよね。**自分を振り返って来場者に訴えるものを作れてたかな**って思った。そういうことを思った時に、もっともっと自分がどういうものを感じてほしいのかを自分自身が勉強して突き詰めなきゃいけないって思った。

全く違う素材の形

作品を通して、**全く違う素材の形もある**んだよって伝えたい。例えば、紙だったら、柔らかくって、もろくって丈夫じゃないっていうイメージがあるけど、それとは**真逆の姿にしたい**のよ。新品の服の中に入っている薄羽紙を使って船を1万3000槽折るプロジェクトを行っているの。1万3000槽っていうその量と勢い。光に透けた時の見え方とかってすさまじい生命力と感覚があるわけ。今までの紙の見え方とは全く違うものにするとすごく綺麗だったり。そうすることで人はまた別の紙の魅力を感じてくれるでしょ。だから、**綺麗に作品にしてあげただけだよっていうのではなくて全く別のものにはしたい**んだよね。紙とかもすごくもろくて柔らかくて、そんな作品になんてできないようなイメージがあるけれど、沢山の紙にすることによって迫力も出るし紙自体の力強さっていうのも感じることができる。**私は天邪鬼だから、正反対のところを見たがっちゃう**んだよね。

もう一回命を吹き込みたい

流木の作品は木を立たせて使うことが多いかも。**もう一回、命を吹き込みたい**んだと思う。木はさ、最初はすくっと立って育ったでしょ。それが何かしらで倒れて川に流れてバラバラになって海に辿り着いて枝が、転がっている。でも私を通すとまた**一つの形に組み合わせて大きな生命力を持つものとして復活できる**の。それってすごくドキドキすることなんだよね。結局、命があると思っているんだよ。流木だったり、一つ一つのパーツに。**組み合わさることによって、大きな命の形になるように。私自身がそうなりたいのかもしれない。**私自身、何か新しいものを常に求めている。自分の中で何か鈍ってきたなと思ったら気分転換してまた新しい気持ちでどんどん進みたいなと思ってる。だから目の前にある素材に対しても何かリフレッシュしたほうがもっと良い使われ方が出来るんじゃないのかなって、単純にそう思うんだよね。だから実験中かな。いろんな素材で作品を制作してみて、それがアートとして認められるんだったらアリなんだって勉強しながら考えてる。アートになるかならないかってさ、作家の信念だと思うの。**作品に作家の信念が宿っているか宿っていないかで、ものの見方とか雰囲気って変わってくる**から。実験をしつつ、学んでいきたいんだよね。

廃棄物にとって一番成りたい方向へ

今までずごい頑張ってきた子達（流木などの素材）が私を通して再生出（サイセイシュツ）して新しい形に起こすっていう行為が自分の中で素晴らしいことだと思ったの。面白いよ本当に。今は、アートを通して地域を通して、自

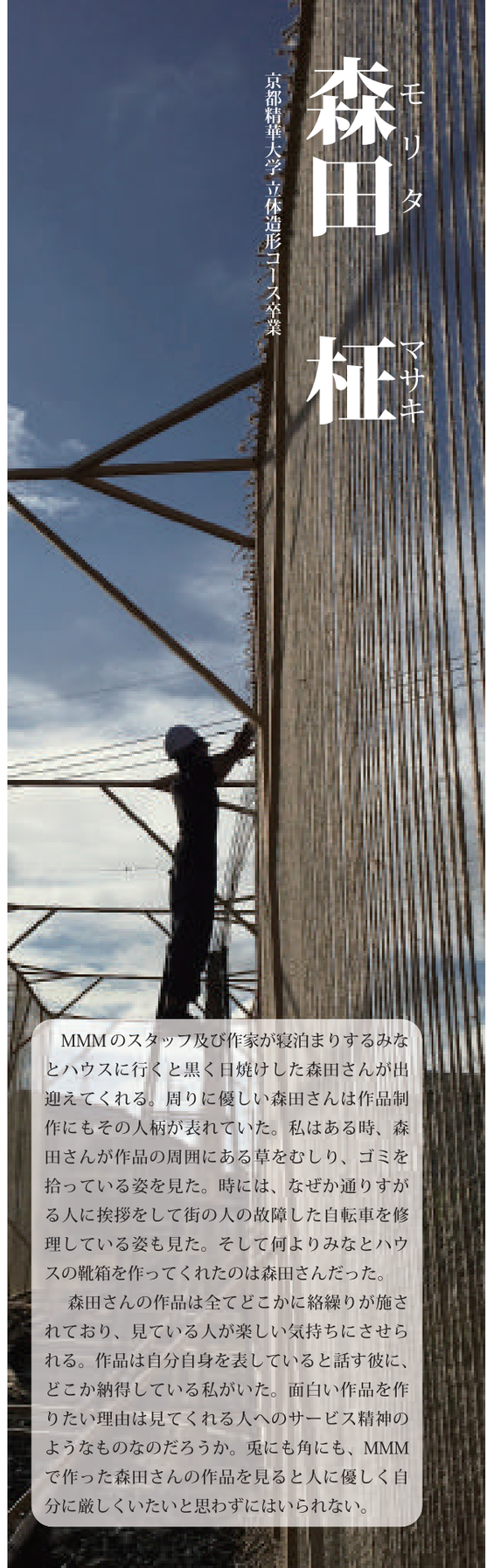
～考えのアップデート～

浜辺で流木採集をしていた際、私は「カモメの翼や胴体になる可能性を秘めている流木を探してね。」と松井さんからアドバイスを受けた。私は浜辺に散らばっている流木を注視し手に取ってよく見るようにした。すると、流木の一つ一つが私に個性を主張しているように見えた。流木の大きさ、色、曲がり方、折れ方、重さ。それぞれ流木は素材の個性を持っている。ゆっくり海を見ながら、地域の人とたわい無い話をしながら、流木を集める、これこそ流木採集の醍醐味なのかもしれない。

森田さんの作品「対峙した 場所」の様子

森田 杜 モリタ マサキ

京都精華大学 立体造形コース卒業



仕事を選択できる立場にいたい

僕は高校の頃、**経営者になりたかった**んですよ。高校の担任の先生が経営学部出て社会の教師をやっている人で。僕としては経営者になる人は経営学を学ぶものだと思っていたのでなんでだろうなって不思議と思っていました。僕はその先生に出会って、経営者になるには経営学を学ぶよりも**感性を学ぶ**べきだと思ったんです。人と違う何かがないと経営者になれないのではないかと考えていました。だから僕は芸術をするつもりでではなくて経営者になりたくて美術の大学に入りました。

経営者になりたい理由は、**父の影響**です。父の姿を小さい頃から見てて漠然と経営者になりたいと思っていました。大学時代の頃に思っていた経営者は人に雇われないことだったんです。でも、何にしても雇われていない人はそんなにいないと思うんですね。そこで僕の経営者の概念として、仕事に対して選択できる立場にいたいなと思ったんです。お金や資源も大事だと思うけど、それに惑わされて仕事を選択したくないんですよ。だから、僕にとっての経営者は、「**選択できる立場になる**」ということなんです。

ワクワクすることが動力

将来は芸術の道でいこうと思ってはいます。**いろんな葛藤はあった**んです。将来、結婚して子供を持って家庭を築いていくことも夢だったから、就活もしました。でも就活をしてどうしても頭から離れなかったことがものつくりでした。やってワクワクするかどうかが僕にとっては動力になるか否かだったんです。仕事をしている自分は本当に元気が無くて、だから**単純にやりたいことをやっていこうと思うことにした**んです。

僕の将来の夢はジャニーズでした

高校の頃はジャニーズになりたくて学校外でダンススクールに通ってました。僕の将来の夢はジャニーズでした。中学の時の友達がKAT-TUNを好きになって。多分その影響もあるかもしれないですね。でもダンススクールに通ううちにジャニーズよりダンスに魅力を感じていました。僕はダンスを磨いていく中で、ジャニーズに入るより**ダンス磨いている方が面白いな**と思ってしまったんです。大学に入って学園祭の実行委員をやったんですね。それが本当に面白くなってしまってダンスはやめてしまったんですけどね。だから、ダンスは一時休止って感じです。

大きい作品にはそれなりの迫力がある

作品は大きい方が良いと思っています。手を広げた時の大きさ以上のものを作ると僕のキャパを超えるんです。**見る人のキャパを超えさせることを目標としている**んですけど、見る人のキャパを超えるとその人は必然と驚くんですね。キャパを超えることについて、卒業制作の講評をした先生が「人っていうのは両手を広げるぐらいがキャパなんだよ。それより大きいとねキャパ超えちゃうんだよね。君みたいな子は世界を見た方が良いよ。世界1周しなよ」とか言われて、最初はよく分からないなと思ってたんです。でも、確かに**大きい作品にはそれなりの迫力がある**なと思うようになりました。僕は、一概に大きい作品が良いとは言えないと思うんです。ただでかい作品になってしまう場合もあるので。でも大きい作品を作るのではなくてちゃんとそれに見合ったスケールを出さなきゃいけないと思ってます。つまり**コンセプトがあって思いがあってそれに見合うスケールを出していく**。かといって、コンセプトがしっかり作られてでかいだけじゃなくて、**自分の中で作りたいものを作る**が根底にあります。

目に止まる作品を作りたい

僕の作品は大きさもありますが、**動きを大切にしている**んですよ。動かないか。面白いの見解としては**目に止まる作品**ですね。例えば、美術館に行っても、興味ない作品には目が止まらない。でも目が止まる作品もあってそれらは少なからず良いなと思う作品なんですよね。僕にとっての面白いの判別は良いなと思う作品が面白い、興味がない作品は面白くない、という言い方をしています。見てて楽しくないものは面白くないので。**動きが作品に入ると面白いと思う**んですよ。あと体験型とか。色々作品を見ていて、ただ立っている作品よりも何か体験者がボタンを押せば動いたりする方が目に止まると思ったんです。

なぜそこまで面白い作品にこだわるのか、考えてみれば、恐らく相手に面白いと思って欲しいからではなく**一番の自信作を自分自身が人に見せたい**からですね。アーティストとして自分が一番だと思うものを生み出したい。僕自身が、僕の作品を見せたいと思える気持ちにならないとダメだと思ってます。僕が**世に出している作品は自信満々のものだけ**です。

北へ北へ

実家が鳥取なんですけど、公募展に出すために移住したりする内に**北へ北へと**進んでいます。移住することに何ら躊躇いはありません。実家が嫌いとかではなく、むしろ大好きですし、いつかは勿論、鳥取に帰ろうと思っています。必然と短期に仕事を沢山持ってお金を貯めてから公募展に出すっていうことの繰り返しなので、仕事を求めるとなると、都心部になりますよね。**自分の作るモノで稼げるようになったら自分の好きな場所に移り住みたい**なと思います。

生き生きとしている人になりたい

芸術は僕にとって、**自分のやりたいことを最大限やらせてもらっている世界**です。今回の作品も地域の公募展だからできることだと思うんですよね。

僕は生き生きとしている人になりたいんです。僕がかっこいいと思える人はみんな生き生きとしているんですね。多分自分のやりたいことに突き進んでいたり、目標に向かっているからだと思います。僕もやりたいことをやると決めたので頑張らなくちゃなと思います。

MMMのスタッフ及び作家が寝泊まりするみなとハウスに行くと黒く日焼けした森田さんが出迎えてくれる。周りに優しい森田さんは作品制作にもその人柄が表れていた。私はある時、森田さんが作品の周囲にある草をむしり、ゴミを拾っている姿を見た。時には、なぜか通りすがる人に挨拶をして街の人の故障した自転車を修理している姿も見た。そして何よりみなとハウスの靴箱を作ってくれたのは森田さんだった。

森田さんの作品は全てどこかに絡繰りが施されており、見ている人が楽しい気持ちにさせられる。作品は自分自身を表していると話す彼に、どこか納得している私がいた。面白い作品を作りたい理由は見てくれる人へのサービス精神のようなものなのだろうか。兎にも角にも、MMMで作った森田さんの作品を見ると人に優しく自分に厳しくいたいと思わずにはいられない。

～考えのアップデート～

森田さんとのインタビューはMMMのスタッフ及び作家が寝泊まりするみなとハウスで行われた。日焼けで腕の肌の皮が剥けていることを気にしながら、森田さんは幼少期から今までのこと、作品に対しての思いを話してくれた。森田さんの過去は私にとってかなり面白いものだった。ジャニーズがきっかけでダンスに夢中になったり、ものつくりの面白さに目覚めたり、聞いていて奇想天外の連発だった。

vol.1 の最後に。

６人のインタビューを終えて、私は自分が思っている以上に
彼らに影響されていることに気付いた。
普段となんら変わらない生活をしていても、
彼らの言葉がどこからか浮かんでくる。

就活に必死な学生の Twitter の発言を見ても、
「誰の人生をこの人は生きているんだろう」と考えたり。
街を歩き、「for rent」という看板すら立たない空き家を見て
「あーきっとあの作家なら被写体にするかもな」とか。
私にとって嫌悪感を抱くゴミやものが公共の場に置いてあっても、
「誰かにとってはとても大切なものかもしれない」
とよく観察したりするようになったりとか。
普段は絶対に見えないようなものに気付けるようになったし、
目を向けるようになった。

1 人に対して 2 時間近く、インタビューを行い文字起こしをして、
編集してみると生き方やものの見方を表す作家自身の言葉が輝いて見えた。
MMM は沢山の価値観が一同に交差する場所なんだ、と改めて思った。

あなたはどんな生き方をして、何を感じて生きているの？
そんな素朴な好奇心が私を動かしている。

田口 茜

田口　茜（タグチ アカネ）

1996 年生まれ

慶應義塾大学環境情報学部３年

MMM2016 キュレーション担当

大学ではオーラルヒストリーゼミに所属し、インタビューの実践を行っている。
”インタビューを通して、身近な人との関係性を見返す”ことをミッションに掲げ、ワークショップを行う「かぞくオーラルプロジェクト」での活動がある。

連絡先　t14512at@sfc.keio.ac.jp

Facebook でもご連絡お待ちしております。

発行所　〒 252-0882 神奈川県藤沢市遠藤 5322

清水唯一朗研究室

後藤さん、山本さん、臼田さん、木内さん、松井さん、森田さん。
「MMM2016 の作家たち　vol.1」を発行するにあたり、
お忙しい中、インタビューにお答え頂きありがとうございました。
今後も、このプロジェクトは続いていきます。
MMM の活動含め、温かく見守って頂ければと思います。

そして、校閲を頼んだ渡辺 佳奈、鈴木 俊哉に深く感謝しています 。
文章構成だけでなく、私と一緒に適切な言葉を選び、推敲してくれたこと。
冊子作りを支えてくれたこと。本当にありがとう。